

坂口安吾

湯の町エレジー



湯の町エレジー

新聞の静岡版というところを見ると、熱海を中心にした伊豆一帯に、心中や厭世えんせい自殺が目立って多くなつたようである。春先のせいか、特に心中が多い。

亭主が情婦をつれて熱海へ駈落かけおちした。その細君が三人だか四人だかの子供をつれて熱海まで追ってきて、さる旅館に投宿したが、思いつめて、子供たちを殺して自殺してしまった。一方、亭主と情婦も、同じ晩に別の旅館で心中していた。細君の方は、亭主が心中したことを

知らず、亭主の方は、女房が子供をつれて熱海まで追つてきて別の旅館で一家心中していることを知らなかつた。亭主と細君はおのおのの一方に宛てて、一人は陳謝の遺書を、一人は諫言かんげんの遺書をのこして、同じ晩に、別々に死んだのである。

偶然の妙みょうとも云えるが、必然の象徴とも云える。夫婦の一方が誰かと心中する時期は、残る一方が一家心中したくなる時期でもあるからである。近松はこれを必然の象徴とみて一篇の劇をものすかも知れないが、近代の批判精神は、これをあくまで偶然と見、茶番と見る傾

向に進みつつあると云えよう。古典主義者はこれを指して、近代の批判精神はかくのごとくに芸術の退化を意味すると云うかも知れぬ。

温泉心中もこれぐらい意想外のものになると別格に扱われるが、新聞の静岡版というものは、普通、官報の辞令告示のように、毎日二ツ三ツの温泉自殺を最下段に小さく並べている。静岡版の最下段は温泉自殺告示欄というようなものだ。その大多数は熱海で行われる。

そこで、今年になって、熱海の市会では、自殺者の後始末用として、百万円の予算をくんだそうだ。

所持金使い果してから死ぬのが自殺者の心理らしい。稀まれには、洋服を売って宿賃にかえてくれ、などで行届いた配慮を遺書にのこして死ぬ者もあるが、屍し体たいひきあげ料、棺桶料金まで配慮してくれる自殺者はいないので、伊豆の温泉のお歴々が嘆くのである。コモ一枚だってタダではない。実に、物価は高いです。それが毎日のことではないですか。ああ、熱海市会は百万円のタメ息をもらす。

大島の三原山自殺が盛大の頃は、こうではなかった。光栄ある先鞭せんべんをつけた何人だかの女学生は、三原山自殺

の始祖として、ほとんど神様に祭りあげられていた。後につづく自殺者の群によってではなく、地元の島民によってである。何合目かの茶店の前には、始祖御休憩の地というような大きな記念碑が立っていたのである。

大島は地下水のないところだから、畑もなく、島民はもっぱら化け物のような芋を食い、栄養補給にはアシタツパ（または、アスツパ）という雑草を食い、牛乳をのんでいた。アシタツパという雑草は、今日芽がでると明日あしたは葉ツパが生じるという意味の名で、それぐらい精分が強いという。大島の牛はそれを食っているから牛乳が濃

くてうまいという島民の自慢だ。

三原山が自殺者のメツカになるまで、物産のない島民は米を食うこともできなかつた。自殺者と、それをめぐる観光客の殺到によつて、島民はうるおい、米も食えるし、内地なみに暮せるようになったという。

だから彼らが始祖の女学生を神様に祭りあげるのは、ムリがない。醇^{じゆんこ}乎^こたる感謝の一念である。おまけに、火口自殺というものは、棺桶代も、火葬の面倒もいらぬ。火口ではオペラグラスの賃貸料がもうかる始末で、後始末の方は全然手間賃もいらぬのである。

雲煙うんえんの彼方かなたに三原山が見える。星うつり年かわって自殺者の新メツカとなつた熱海は、コモもいるし、棺桶もいる。観音教の教祖は熱海の別荘をあらかじめ買占めて、はるか桃山の山上に大本殿を新築中であるが、自殺者の屍体収容無料大奉仕というようなことは、やってくれないのである。

熱海にくらべれば、私のすむ伊東温泉などは物の数ではない。それでも時折は、こんな奥まで死にくる人が絶えない。もっと奥へ行く人もある。風船バクダンの博士は、はるか伊豆南端まで南下し、再び北上して、天城あまぎ

山麓の海を見おろす松林の絶勝の地で心中していた。風船バクダン博士という肩書にもよるかも知れぬが、この心中尸体に対しては、土地の人々の取扱は鄭重ていちようをきわめたそうである。一つには、地域的な関係もある。

心中も、伊東までは全然ダメだ。誰も大切にしてくれない。伊東を越して南下して、富戸ふとから南の海へかけて飛びこむと、実に鄭重な扱いをしてくれるそうだ。

水屍体をあげると大漁があるという迷信のせいである。現に大漁の真ツ最中でも、尸体があがると、漁をほつたらかして、オカへ戻り鄭重に回向えこうして葬ほうむるそうだ。

さらにより大いなる大漁を信じているからだという。富
 戸という漁村は水屍体を鄭重に葬ることには歴史があつ
 て、頼朝が蛭ひるヶ小島こじまに流されていたとき伊東祐親すけちかの娘八
 重子と通じて千鶴丸せんづるまるをもうけたが、祐親は平氏に親しん
 でいたから、幼児を松川の淵ふちへ棄てさせてしまった。稚児ちご
 の屍体は海へ流れて、辿たどりついたのが富戸の断崖の海岸
 だ。これを甚衛門じんえもんという者が手厚く葬ったところ、後日
 將軍となった頼朝の恩賞を蒙こうむり、その子孫は生川うぶかわの姓
 を名乗って現存しているという。

千鶴丸を殺させた祐親は後に拳兵の頼朝と戦って敗死

したが、彼は河津三郎かわづの父であり、曾我兄弟には祖父に当る。曾我の仇討というものは、単なるチャンバラではなくて、そもそもの原因は祐親が兄の所領を奪ったのが起りである。つまり亡兄の遺言によって亡兄の一子工藤祐経すけつねの後見となった伊東祐親は、祐経が成人して後も所領を横領して返さなかった。祐経は祐親の子の河津三郎を殺させ、源氏にたよって父の領地をとりかえしたから、今度は河津三郎の子の五郎十郎が祐経を殺したというわけだ。祖父から孫の三代にわたる遺産相続のゴタゴタで、元はと云えば伊東祐親の慾心よくしんから起っている。講談では

祐親は大豪傑だが、曾我物語の原本では、悪党だと云っている。もつとも、伊豆の平氏を代表して頼朝と戦った武者ぶりは見事で、豪傑にはちがいない。

伊東は祐親の城下であるが、そのせいではなかるうけれども、水屍体は全然虐待される。富戸と伊東は小さな岬を一つ距へだてただけで、水屍体に対する気分がガラリと一変しているのである。伊東の漁師には、水屍体と大漁を結びつける迷信が全く存在していないのである。

しかし、同じ伊豆の温泉都市でも、熱海にくらべると、伊東は別天地だ。自殺にくる人も少いが、犯罪も少い。

兇悪犯罪、強盗殺人というようなものは、私がここへ来てからの七カ月、まだ一度もない。

その代り、パンパンのタツクルは熱海の比ではない。

明るい大通りへ進出しているのである。さらば閑静かんせいの道

をと音無川おとなしの清流に沿うて歩くと、暗闇にうごめき、ま

たは又ツとでてくるアベツクに心胆しんたんを寒からしめられ

る。頼朝以来の密会地だから是非もない。頼朝が密会し

たのもこの川沿いの森で、ために森も川も音を沈めて彼らの囁きをいたわったという。それが音無川の名の元だという。伊東のアベツクは今も同じところにうごめいて

いるのである。

二週間ほど前の深夜二時だが、私の借家の湯殿の窓が一大音響と共に内側へブツ倒れた。私は連夜徹夜してゐるから番犬のようなものだ。音響と同時に野球のバットと懐中電灯を握りしめて、とびだした。伊東で強盗なぞとはついぞ聞いたことがないのに、わが家を選んで現れるとは。しかし、心当りがなくてもない。税務署が法外な税金をフツかけ、新聞がそれを書き立てたのが二三日前のことだからだ。知らない人は大金持だと思う。

外は皎々たる満月。懐中電灯がなんにもならない。こ

んな明るい晩の泥棒というのも奇妙だが、イロハ加留多かるとにも月夜の泥棒があるぐらいだから、伊豆も伊東まで南下すると一世紀のヒラキがあつて、泥棒もトンマだろうと心得なければならぬ。

とにかくサンタンたる現場だ。鍵をかけたはずの二枚のガラス戸が折り重つて倒れている。内側の戸が外側に折り重つているのである。

戸外には十五メートル米メートルぐらいの突風が吹きつけているが、キティたいふう颱風を無事通過した窓が、満月の突風ぐらいでヒツクリ返るはずがない。人為的なものだとテンから思い

こんでいるから、来れ、税務署の怨霊おんりよう。バットを小脇に、夜明けまで見張っていた。

隣家には伊東署の刑事部長が住んでいる。つまり伊東きつてのホンモノの名探偵が住んでいるのだ。

私は推理小説を二ツ書いて、この犯人を当てたら賞金を上げるよなどと大きなことを言ってきたが、実際の事件に処しては無能のニセモノ探偵だということは再々経験済みであった。しかし、この時は推理に及ぶ必要がない。泥棒にきまつていると思いきんでいた。

翌朝、隣家のホンモノの名探偵は現場に現れて、静か

に手袋をはめ、つぶさに調べていたが、

「風のイタズラですな」

アツサリ推理した。

浴室の窓だから、長年の湯気に敷居しきいが腐くさって、ゆるんでいたのだ。外側から一本の指で軽く押しても二十度も傾く。突風に吹きつけられて土台が傾いたから、窓が外れ、風の力で猛烈じやぐちに下へ叩きつけられた。そのとき内側の窓枠が水道の蛇口じやぐちにぶつかったから、はねかえって、内側の戸が外側に折り重ったという次第であった。

この結論までに、ホンモノの名探偵は五六分しか、か

からなかった。推理小説の名探偵はダラシがないものだ。

二人の探偵の相違がどこにあるかというところ、ホンモノの探偵は倒れた窓をジッと見ていたが、おもむろに手袋をはめると、まず第一に（しかり。まず、第一に！）敷居に手をかけて押してみたのである。ほかに何もしないで、まず敷居に手をかけて押してみた。驚くべし。敷居は自在にグラグラうごき、その都度二十度も傾いたのである。

私ときては、敷居は動かないものときめて、手で押して調べてみることなどは念頭になかった。そのイワレは、

キテイ颯風を無事通過した窓が満月の突風ぐらいでヒツクリ返るはずがないということだ。私はテンから泥棒ときめこんで、まず足跡あしあとをしらべ、どこにも足跡がないので、ハテ、風かな、と一抹いちまつの疑念をいだいたような、まことに空想的な推理を弄もてあそんでいたのである。

要するに、これも税務署の寒波によるせいかも知れない。推理小説の名探偵も、心眼が曇ったのである。伊東という平和な市には、深夜にうろつくのはアベックばかりだ。その勢力は冬でも衰えが見えない。こうアベックがうろついては、泥棒もうろつけないに相違ない。そし

て私の住居こそはほぼ頼朝密通の地点そのものに外ならぬのである。

伊東を中心に、熱海、湯河原、箱根などの一級旅館を荒していた泥棒がつかまった。俗に、枕さがし、とか、カントン師とか云って、温泉旅館では最も有りふれた犯罪だ。しかし、一人の仕事としては被害が大きい。伊東だけでも、去年の暮から四十件、各地を合せると三百万円ぐらい稼いでいた。前科七犯の小男で、ナゲ肩の優男やさおとしだという。

この犯人は極めて巧妙に刑事の盲点をついていた。

彼は芸者をつれこみで旅館に泊る。あるいは、芸者をよんで、泊める。ちよツと散歩してくると、芸者を部屋にのこして、ドテラのままフラリとでる。そして、たてこんでいる一級旅館へお客のフリをしてあがりこんで、仕事をするのである。自分の泊っている旅館では決してやらない。ここが、この男の頭のよいところだ。

旅客のフリをして廊下かなんか歩いていて、浴室の留守の部屋へあがりこんで、金品を盗みとって、素知^{そし}らぬフリをして戻ってくるのである。

自分の部屋には芸者が待たしてあるから、いわばアリバイがあるようなもので、さすがの探偵たちも、この男が犯人だということは、他のキツカケがなければ、なお相当期間発見されなかつたろう。

伊東の暖香園だんこうえんへ泊った浜本浩氏もカバンをやられた。その同じとき、伊東在住の文士のところへ税額を報らせに来た文芸家協会の計理士某氏が伊東市中を自動車でグルグル乗りまわしていて、第一級の容疑者として睨にらまれたそうだ。してみると、私も陰ながらツナガリがあつたのである。私はそのとき、前回の巷談こうだんのために、小田原

競輪へ泊りがけで調査にでむいていて、留守であった。

この男がつかまったのは、いつもの奥の手をちよツと出し惜おしんだせいだったそうだ。ドテラの温泉客のフリを忘れて、洋服のまま、伊東温泉の地下鉄寮というところへ忍びこんだ。見破られて逃走したが、襟えりクビをつかまれ、上衣を脱ぎすててのがれたが、洋服のポケットに自分の写真を入れていたのが運の尽き、指名手配となったのである。

伊東署の刑事は情報を追うて長岡、修善寺と飛んだが、逃げるとき連れて行った伊東の芸者のことから、湯河原

の天野屋旅館にいたことが分った。時に三月三日、桃の節句の真夜中で、五名の刑事は一夜腕を撫^ぶし、四日の一番列車で伊東を出発して、湯河原の目ざす旅館へついたのが六時半、寝こみを襲って、つかまえたという。

そのとき、この男は革のカバンに、十一万三千円の現金と、外国製時計七個（うち四個金側）、ダイヤ指輪二ツ、写真機、万年筆四本、等をもっていた。私の全財産よりも、だいぶ多い。万年筆まで、文筆業の私よりもタクサン持っていたのである。ほかに雨戸や錠^{じょう}前^{まえ}をこじあけるためのペンチその他七ツ道具一式持っていたが、

七ツ道具を使って夜陰やいんに忍びこむのは女をつれていない時で、機にのぞみ、変に応じて、手口を使い分けていたが、結局七ツ道具の有りふれた方法を弄もてあそんだために失敗するに至ったのである。

思うに、この先生は、ほかの泥棒のように、セツパつまった稼ぎ方はしていなかつたのである。主として芸者をつれて豪遊し、そうすることによって容疑をまぬがれ、当分の遊興費には事欠かないが、ちよツとまア、食後の運動に、趣味を行ふ、という程度の余裕綽しやくしやく々たるものであつた。天職を行ふには、常にこれぐらいの余裕が必

要なものである。セツパつまつて徹夜の原稿を書いている私などとは雲泥うんでいの差があるようだ。

説教強盗などのように、強盗強姦などと刃物三昧さんまいや猫ナゲ声のミミツチイ悪あくどさも無いし、世帯やつれしたところもない。芸者をつれて豪遊し、それがアリバイを構成し、食後の運動、又、時にはコソ泥式の忍び込みもするとところなども通算して一つの風流をなしている。惚れ惚れする武者ぶりだ。どこかバルザックの武者ぶりに似ている。大芸術というものは、これぐらいの武者ぶりと綽々たる余裕がないと完成できない性質のものだ。

しかし、ここまでは序の段で、話の本筋はこの後にあるのである。

彼が捕えられて伊東署へ留置されると、芸者、料理屋、置屋などからゴツソリ差入れがあった。ところがこの先生、山とつまれた凄い御馳走には目もくれず、ハンストをやりだしたのである。警察も仕方なく栄養剤の注射をうって、持久戦に入った。

私はわが身の拙つたなさを考えたのである。まず第一に、私が警察につかまっても、芸者や、料理屋や、待合や、置屋などからゴツソリ差入れがあるという見込みがな

い。第二に、ゴツソリ差入れがあつたとしても、それには目もくれずハンストをやるなどというフルマイができるとは信ぜられないからであつた。

ハンストなどというものは、甚しく毅然きぜんたる精神を必要とするものに相違ない。集団ハンストとか、銀座街頭のハンストなどは、下の下である。

孤独なるハンストに至つては、奥深くして光芒こうぼうを放ち、神秘にして毅然、とうてい凡夫ぼんぷの手のとどく境地ではない。一つの高く孤独なる魂の運動を直線とする。俗物どもの低俗な社会契約が、この直線を切るのである。その

切点は一瞬に火をふく。高い孤独な魂の苦悶が一瞬に鋭い慟哭どうこくと化したからである。それは流星が空気にふれて火をふきその形を失うのに似ている。——こう考えて、私はことごとく敬服した。

折から文藝春秋新社の鈴木貢みつぐが遊びにきたので、私は温泉荒しの敬服すべき武者ブリについて、説明した。

「バルザックの武者ブリは、当代の文士の生活にはその片鱗へんりんも見られないね。たまたま温泉荒しの先生の余裕綽々たる仕事ぶりに、豪華な制作意欲がうかがわれるだけだ。芸道地に墜おちたり矣」

鈴木貢は社へ戻って、温泉荒しの武者ブリを一同に吹聴した。

膝をたたいたのが、池島信平である。

「巷談の五は、それでいこうよ。グツと趣おもむきを変えてね」

ただちに私のところへ使者がきた。池島信平という居士ふさふさの房々と漆黒しつこくな頭髪せんこうの奥には、ここにも閃光せんこうを放つ切点があるらしいので、私はニヤニヤせざるを得ない。

「なるほどね。温泉風俗を通して世相の縮図をさぐり、湯泉荒しの武者ブリを通して戦後風俗の一断面をあば

く、とね。これも閃光を放つ切点か」

私は使者に言った。

「どうも、巷談の原料になるかどうか、新聞だけじゃ分らないよ。いったい、なんのためにハンストやってるの
だろう？ いろいろ、きいてみないとね」

「それは、もう、手筈てはずがととのっています」

伊東に住んでいる車谷弘が総指揮に当って、カナリヤ書店と「新丁」という鰻屋の主人を参謀に、警察や芸者や料理屋の主人や旅館の番頭女中などにワタリをつけて、一席でも二席でも設けて話をききだす手筈がととの

っているというのだ。

私は、たしかに、興味があつた。なぜ、ハンストをやっているのだろうか？ どうして、そんなに差入れがあるのだろうか？ と。

最も卑俗なところを忘れてはいけな、と私は自戒した。とかくそれを忘れがちだからである。窓の土台を押ししてみるのを忘れて推理しているたぐいだ。

そこで私は考えた。ハンストというのはマユツバモノだ。先生、豪遊がすぎて、腹をこわしているのじゃない

か、と。

警察の人にきいてみると、私の考えた通りで、

「あれには騙だまされましたよ。ナニ、連日の飲みすぎで、下痢してたんですな。相当に胃がただれているようですよ」

しかし、これも真相ではなかった。その数日後も、彼はまだハンストをやっていた。しかし、流動物はとる。そして、日に日に痩せている。すでに十七日目であった。

「ええ、まだハンストをやっていますよ」
と、別の警察の人が言った。

「そして、犯行についても、全然喋りませんな。上衣の襟クビを捉えられた地下鉄寮と、もう一軒物的証拠を残してきた旅館の犯行のほかは否認して、口をつぐんでいます」

なるほど、否認するためのハンストかと私は思ったが、これも真相ではなかった。真相というものは、まことに卑俗なものである。

「あれはですな。ハンストをやって流動物だけ撮っていると、衰弱して、保釈ということになります。前科何犯という連中、特に裕福な連中、二号三号をかこっている

という連中がこれをやります。常習の手ですよ。あの先生も、二号というほどのものはないでしょうが、金は持っていますからな。保釈になって、それをモトデに、見残した夢を見ようというわけです」

狸御殿たぬきごてんの殿様などは、この手の名人だということである。保釈で出ては新しい仕事をしている。

温泉荒しの泥棒ちのうはんといっても、たしかに、彼の場合は、完全な智能犯だ。狸御殿の殿様よりも、チミツなどところがあるかも知れない。彼の編みだした温泉荒しの方法は、勝負が詐欺さぎよりも手ツとり早いし、ある意味では、安全

率が高い。なぜなら、誰にも姿を見られていないからである。見た人はあっても、疑われてはいない。

かくの如くに頭脳優秀な彼が、もてる金を有効適切に活用するために、ハンスト、保釈を計画したのは当然で、保釈ということを知らなかった私がトンマということになる。

ところが、智能犯は彼一人ではない。犯と云っては悪いけれども、まことに、どうも、生き馬の目をぬくこと、神速、頭脳優秀なのは彼一人ではなかったのである。

芸者、料理屋、待合などから、なぜゴツソリ差入れが

あるかというのと、これがまた、彼の持てる金ゆえであるという。つまり、彼に貸金のある連中が、それを払って貰うために、セツセと差入れしているのである。

私はこれをきいてアツと驚き、しばしは二の句のつげない状態であった。まことに、どうも、真相は卑俗なものだ。

彼が湯河原で寝込みを襲われて捕えられたとき一しよにいた芸者は、弁当や菓子など差入れていたが、ハンストと知って、チリ紙などの日用品を差入れることにした。一念通じて、彼女が先ず一万五千円の玉代ぎよくだいをもらいう

け、かくて、彼の所持金は九万八千円になったが、それ以下には減っていないということだから、ほかの差入れは未だにケンが見えないのである。

泥棒とは云っても彼ぐらいの智能犯になると、兇器などというものは所持してもいないし、使ったこともない。温泉旅館というものの宴会、酔っ払い、混雑という性格を見ぬき、万人の盲点をついて、悠々風ゆうゆうのごとくに去来していたにすぎない。どの芸者とくらべても、彼の方が小さかったというほどの五尺に足らない小男で、女形のようなナデ肩の優男であるというから、兇器をふりまわ

しても威勢が見えないという宿命によるのかも知れないが、同じ泥棒をやるなら、彼ぐらい頭をはたらかして、一流を編みだしてもらいたいものだ。

私は探偵小説を愛読することによって思い至ったのであるが、人間には、騙されたい、という本能があるようだ。騙される快感があるのである。我々が手品を愛すのもその本能であり、へ々な手品に反撥するはんぱつのもその本能だ。つまり、巧妙に、完璧に、だまされたいのである。

この快感は、男女関係に於ても見られる。妖婦ようふの魅力は、男に騙される快感があることによって、成立つ部分

が多いのだらうと思う。嘘とは知っても、完璧に騙されることの快感だ。この快感はまったく個人的な秘密であり、万人に明々白々な嘘であっても、当人だけが騙される妙味、快感を知ることによって、ますます孤絶して深間におちこむ性質のものだ。水戸の怪僧のインチキ性がいかに世人に一目瞭然であつても、騙される快感はむしろ個人の特権として、ますます身にしみることになるのかも知れない。

温泉荒しのハンスト先生の手口も、どうにも憎みきれないところがある。その独創的な工夫に対して若干の敬

意を払わずにはいられないし、風のごとくに去来する妙味に至ってはいささか爽快そうかいを覚えるのである。

敗戦後はまことにどうも無意味な兇悪事件がむらがり起っている。意味もなく人を殺す。静岡県の小さな町では、十八の少年が麻雀の金が欲しさに、四人殺して、たった千円盗んだ。無芸無能で、こういう愚劣な例は全国にマンエンしている。戦国乱世の風潮である。

同じ乱世の泥棒でも、石川五右衛門が愛されるのは、彼の大義名分によることではなくて、忍術のせいだ。猿飛佐助も霧隠才蔵も人を殺す必要がないのである。彼ら

は人をねむらせて頭の毛を剃るそようなイタズラをやるが、いつでも睡らせることができるから、殺す必要はない。殺さなければならぬのは、敵方の大将だけだが、因果なことに、殺すべき相手に限って身に威厳がそなわり、術が破れて、近づくことが出来ないのである。

人間の空想にも限界があるから面白い。天を駈ける忍術も、万能ではあり得ないのである。おのずから善なるもののみしか、万能ではあり得ない。サタンが万能では、悪きわまることなく、物語に必要な救いというものがないからである。

しかし、忍術物語というものが万人に愛されてきた理由の大いなるものは、人間の胸底にひそむ「無邪気なる悪」に対する憧憬しょうけいだ。それはまた、だまされる快感と一脈通じるものであり、あるいは表裏をなすものでもある。

人間がみんな聖人になり、この世に悪というものがなくなったら幸福だろうと思うのは、茶飲み話しの空想としては結構であるが、大マジメな論議としては、正当なものではないだろう。人間のよろこびは俗なもので、苦楽相半ばするところに、あるものだ。悪というものがな

くなれば、おのずから善もない。人生は水の如くに無色透明なものがあるだけで、まことにハリアイもなく、生きガイもない。眠るにしかずである。

人間は本来善悪の混血児であり、悪に対するブレーキと同時に、憧憬をも持っているのだ。そして、憧憬のあらわれとして忍術を空想しても、おのずから限界を与えずにはいられないのである。これが人間の良識であり、しゃはん這般の限界に遊ぶことを風流と称するのである。

忍術にも限界があるということ、この大きな風流を人々は忘れてしているようだ。

大マジメな人々は、真理の追求に急であるが、真理にも限界があるということ、この大切な「風流」を忘れているから、殺気立ってしまふ。すぐさまプラカードを立てて押し歩き、共産主義社会になると人間に絶対の幸福がくるようなことを口走る。

人間社会というものは、一方的には片付かない仕組みのものだ。善悪は共存し、幸不幸は共存する。もつと悪いことには、生死が共存し、人は必ず死ぬのである。人が死ななくなった時、人生も地球も終りである。いくら大マジメでも、一方的な追求に急なことは賀す

べきことではない。大マジメな社会改良家も、大マジメな殺人犯も、同じようなものだ。いずれも良識の敵であり、ひらたく云えば、風流に反しているのである。

敗戦後の日本は、乱世の群盗時代ぐんとうでもあるが、反面大マジメな社会改良家の時代でもあり、ともに風流を失した時代でもあるのである。

私がハンスト先生に一陣の涼風を覚えたのは、泰平たいへいの風流心をマザマザと味得させられたからで、私は大マジメな社会改良家には一向に親愛を覚えませんが、この先生には親愛の念を禁じ得ないのである。

泥棒をやるぐらいなら、これぐらい手際よくやっても
らいたい。何事にも手際というものが大切だ。仕事には
手際が身上だ。それが人間の値打でもある。

手際の良さということには、救いがあるのである。騙
される快感というものを、万人が持っているからだ。帝
銀事件の犯人がほかに居ればよいという考えは、平沢氏
に対する同情からのことではなくて、手際よき忍術使い
への憧憬だ。警察にはお気の毒だが、人間にはそういう
感情があり、風流は、そういうところに根ざしているも
のなのである。

私がハンスト先生に憎悪ぞうおの念がもてない理由の一つには、温泉町の特性から来ているものがある。ドテラの着流しで夜の街をゾロゾロ歩いている温泉客というものは、銀座の酔ッ払いとは違っている。

二人は同じ人かも知れないが、銀座で酔ッ払っている時と、ドテラの着流しで温泉街を歩いている時は、人種が違うのである。温泉客というものには個性がない。銀座の酔っ払いは女を見るに恋人という考えを忘れていないが、温泉客は十把じっぱ一ひとからげにパンパンがあるばかりで、恋人を探すような誠意はない。完全に生活圏を出外

れて、一種の痴呆状態であり、無誠意の状態でもある。生活圏内の人間から盗みをするのは気の毒であるが、生活圏外の人間から盗みをするのは気の毒ではないような感情が、温泉地に住んでいると、生れてくるようである。

これは温泉客の性格であると同時に、日本人が団体的になった場合の悲しむべき性格でもあるようだ。どうにも、人間という感じがしない。生活圏にいる人の同族の哀れさというものが感じられないのだ。

温泉地と温泉客との関係は、日本占領地と日本軍のよ
うな血のツナガリのない関係だ。温泉の団体客というも

のは、マニラ占領の日本兵隊を感じさせるのである。

温泉街を土足で蹴^けっているのである。私が温泉商店街のオヤジだったら、ずいぶんボリたくなるような気持だが、オヤジ連はその割にボラないのである。ジツと我慢しているのかも知れない。

だからハンストの先生は、温泉地の悪童からは、あんまり憎まれていないようである。

(昭和二十五年五月)

日本文学電子図書館

「坂口安吾 ちくま日本文学009」

著 者：坂口安吾

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年9月25日 第2刷発行



日本文学電子図書館